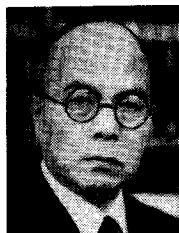


## 研究と「遊び」

えびし せつる  
江橋 節郎

岡崎国立共同研究機構生理学研究所長  
日本学芸院会員・東京大学名誉教授



### 江橋 節郎

昭和19年東京帝国大学医学部卒業、34年～58年東京大学教授(医学部)、46年より理学部併任、58年より生理研教授を経て60年より所長。筋収縮のCa制御を研究、43年度朝日文化賞、47年日本学士院恩賜賞、50年文化勲章、52年英国王立協会外国会員。

我が国が産んだ最高の生理学者の一人、萩原生長(すすむ)さんが亡くなった。肺活量わずか900cc、その一生は、日本人の業(ごう)といわれた結核とその後遺症との苦闘の連続であった。萩原さんといえば、国際的にはカルシウム・スパイクの確立者として名高いが、われわれ同時代に生きた者にとっては、その初期の仕事は、まことに懐かしい。

萩原さんは根っからの生き物好き、その興味の対象も広く、真底からの博物学者であった。しかし、単なる蒐集やウォッチングにとどまることなく、病床上で聞き耳を立てた蟬の鳴き声から出発して、ついに飛翔筋(flight muscle)の神経支配機構の解明に至った。つまり、趣味を学問に転化したのである。

ここは追悼の記を書くところではないので、これ以上萩原さんの話をするのは控えるが、要するに萩原さんの学問の出発点は「遊び」であった。「遊び」が学問のモチーフとして最も重要だとはいわない。しかし、いまほど「遊び」の要素がなくなった時代は、生物学史上かつてないのではないだろうか。

事態がこのようになったのは、素朴な現象論がもはや生物学の原点ではなく、生命現象を物理的、化学的に基礎づけることが、より科学的と考えるような風潮に負うところが大きい。この40年の分子的アプローチのめざましい成功は、この傾向に拍車をかけた。その結果、生物科学は莫大な研究費を要する学問となり、一見精密科学的な様相を具えてきたのである。とどのつまりは、経済原理が生物科学を支配することとなり、研究はますます目的志向型、個人的には業績主義となりつつある。つまり、牧歌的風景は影を潜め、すべ

てが都会的になってきたといえよう。

ところで、物理学の領域ではちょっとした異変が起きている。ノーベル賞までもらった超伝導理論が、いかにも素人っぽくみえる実験で覆がえされ、ジャーナリズムを大いに湧かせたのは3年前であるが、最近ではパラジウム黒による核融合(必ずしもすべてが荒唐無稽ではないらしい)ということで、政治家までが目の色を変えている。物理を精密科学の粋と考えていたのものにとっては、まことに意外な話で、まさに偶像崩壊であるが、しばしば非科学よばわりをされてきた生き物屋は、これで多少鬱憤をはらした面もないではない。これとは些か趣が違いますが、マゼラン星雲の新星爆発で発生したニュートリノが、15万光年の行程を経て、日本に到着するという何千年に1回の奇蹟を、廃坑に水を張って待ちうけていたのは、まさに雄大なロマンである。見ようによっては、すでに完成の域に達したかにみえていた物理学に、新しい胎動が始まったのかもしれない。

本来生命という曖昧模糊としたもの(と信じられてきた)を扱うのが生物学であってみれば、物理学よりは、はるかに「遊び」とロマンがあつてよいはずである。高価な機器と多額の研究費なしには現代の生物科学はあり得ないと考える人は、入試がすべてであり、それに何の疑いももたない受験生と似た心情であるといえる。受験勉強の被害は、受験生本人だけに限られる。しかし、研究のビジネス化は、能率を上げるには役立つが、本当に重要なものをミスすることになりかねない。

ここらあたりで、医学、生物学の原点に立ち戻る必要があるであろう。